

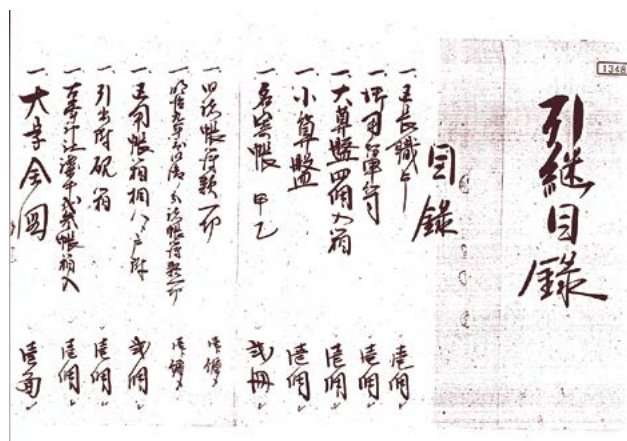


むらで継承された歴史史料

近世以前に成立した村々の多くは、近代以降「大字」や「部落」と呼ばれるようになりました。そして、この「大字」や「部落」で継承されてきた史料を、「区有文書」と呼びます。区有文書には、近世から現代までの多種多様な史料が含まれています。しかし、近世から現代までの長きにわたり、史料をどのように継承してきたのでしょうか？それを知る手がかりとなるのが、区有文書の中に残されている「引継目録」です。

引継目録は、むらの区長が交替する度に作成されます。前の区長から次の区長に、役職と共にむらの重要な記録も引き継がれるからです。ここでは、大正時代から1970年代までの引継について確認できる、千田地区(旧緒川村)に残された区有文書の引継目録から、その一端を伺ってみましょう。

千田地区の引継目録の中で最も古い「那珂郡千田村御検地水帳」という史料の作成年代は寛永18年(1641)となっております。検地といえど存知のように、税や土地に関係します。税や土地などの権利に関わるむらの記録は、特に重要なものとして残されたのです。



千田区有文書 引継目録 昭和17年(1942)



長谷川 達朗氏
近現代史部会 協力員
一橋大学大学院
社会学研究科
総合社会科学専攻
博士後期課程

このような「紙」の記録が大半を占める中、「区長職印」や「御用筆筒」、「大算盤四個箱入」などの「物」も引継目録には記されています。「御用筆筒」というのは、恐らく、むらの文書類が詰め込まれた筆筒のことで、筆筒丸ごと次の区長に引き継がれてきたのでしょうか。また、区長の仕事に必要な印鑑やそろばんなどの道具も継承されていました。

さらに、「紙」や「物」だけでなく「記憶」も継承されたことが引継目録からは伺えます。1970年代の引継目録には、「その他口述」という項目があり、その時々重要なことが口頭で引き継がれていたようです。ただし、こうした項目は、何故か1960年代以前の引継目録にはなく、引継の仕方が時代とともに変化していったと考えられます。

常陸大宮市域には、このようにして継承されてきた区有文書が多数残されています。今後は、区有文書をひも解くことで、さらに詳細にむらの歴史を明らかにしていきたいと思えます。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)